



第二回
心のやみうかひのかへりび
懸闇自飼燒九幕

このひのやみうかひのかへりび
懲閻弟鵠飼燎

米商穂積文三郎
古田新左衛門
渥美己之衛門

甲渥渥・美
作美の娘於夏
乙松左吉

昆尾尾上上
爾菊榮之助助

同 墨田川月雨雲 壱 幕

第第第第第第第第第第第第第
十十十十十
七六五四三二一十九八七六五四三

皐石石駒同鉢甲酒小大小神下隅押
月和和飼古子州匂田磯佛田谷田上
轍村川山狼峠鉢川原三峠川茅川田
淨甲原越小雪子熊相五地網町三甫放
瑠作鵜捕松仕安藏模郎藏船米園
理内遺物殺返宿殺屋門堂宿屋下家
ののののののののののののののの
場場場場場場場場場場場場場

柏箱栗網船角一船名千修駕古飛古船手船車相差一鶴相轍巡旅穗高渥古米
木廻原船木田本頭和^{ササギ}行か若脚道頭先頭夫摸配の遣摸査人積砂美田商
三し多屋賢村角乘鳥^{ササギ}者^{ササギ}屋山具腸蘆向山屋人宮^{ササギ}茂根手の己新穗積
太小之六三ののの墨^{ササギ}本箱^{ササギ}蟻屋船原越犬の糞^{ササギ}の女房^{ササギ}の二階廻國
夫助助右郎^{ササギ}小鬼^{ササギ}次^{ササギ}上總豈^{ササギ}助市吉^{ササギ}十兵義吾千作の丹し勘若鑑於^{ササギ}長兵衛^{ササギ}すぎ^{ササギ}
衛門^{ササギ}所根^{ササギ}圓通坊^{ササギ}助^{ササギ}次者^{ササギ}九助^{ササギ}助^{ササギ}忠藏^{ササギ}忠藏^{ササギ}文三郎^{ササギ}
市市市市坂尾尾尾澤澤坂澤澤尾尾尾坂坂澤澤澤市市市坂坂坂坂
川川川川東上上上村村東東村村上上上東東村村村川川川東東東東
榮^{ササギ}字^{ササギ}宇^{ササギ}登^{ササギ}竹^{ササギ}竹^{ササギ}壽^{ササギ}壽^{ササギ}壽^{ササギ}
九九九九竹^{ササギ}次^{ササギ}幸新由^{ササギ}由^{ササギ}揭^{ササギ}橘^{ササギ}十五^{ササギ}次^{ササギ}八八千千美美美家家家家
藏^{ササギ}藏^{ササギ}藏^{ササギ}藏^{ササギ}松郎^{ササギ}水助^{ササギ}藏^{ササギ}藏^{ササギ}郎^{ササギ}郎^{ササギ}郎^{ササギ}藏^{ササギ}藏^{ササギ}藏^{ササギ}橘^{ササギ}橘^{ササギ}橘^{ササギ}

鐘行高相鶴渥葵玉相栗穗韭鉢六月甲穗鶴三鶴相青文轍鶴七化轍轍甲渥渥。
趙列砂摸遣美妓川摸原横崎子右の作横遣五遣摸鬼三齒遣兵地齒齒作美美、
大奴人屋石の新の屋の福下術輪母の女郎女屋のの玉衛藏のの悴のの
臣菊形娼和抱常娘女娘嫁松の門の於姑房女房の子悴赤川女の赤金乙娘丁
菱の妓の薦磐於房於於 七弟熊ふお於房於お麻德鬼の房三鬼色松於稚
音尉千甲菊小ひ於ささ 兵熊嶽いみい於む磯鬼太 旗於五 鬼 夏左
平 代作藏松い傳きき 衛藏 さねし角ら 郎 六六郎 吉

大
都
瑞
璫
切
初
幘
柏
葉
重
壹
暮

明治十九年六月四日内務省印付

東

第壹番目（席幕）本所枕橋際雨舎の場當時、明治十四年秋
未にして枕橋手前成観の大樹に許に俄雨に逢たる雨舎
せし遊人（月の輪の熊藏）大磯判人（化地藏の三五郎）
向島の若ひ衆（闇の丑松）（柳畑の勇藏）聲坊主（圓通）東仲
源美の娘（於夏）同家の丁稚（左吉）下谷茅町總積（はんざく
林津忠藏）皆々俄雨よ余義無樹下に雨休を待居たる内又
壹人此所に欠込來り湯島切通の古道具屋（吾市）よて番頭
忠藏と顔見合互に一禮なし何行たるやと尋たるよ忠藏
の面目なげよ實は今日所方主人文三郎の行衛を尋ね
未に在所が知ぬ故當惑致由逐一咄（吾市）と豫々貸金の
有文三内を外に出歩行（正鋪藝者小松に心を奪れ泊歩行
よ相違無と四方山の咄の内惡徒（熊藏）の脇よ居たるむ夏
を見て如痴娘を手に入ば能金儲に成んと判人三五郎と心
を合せ宅方迎來る体よなして邊れ車夫と示令此娘を人
力車よ乘向所共無挽て行ぬ跡よ惡徒（熊藏）（三五郎）の兩
人の仕済たりと思入合跡追て行其跡へ一人二人雨の尾休

又我家を差て戻しが彼の古道具屋(吾市)は今宵こよ文三郎殿へ對談の金圓返済の定日故掛合きよは及んと(忠藏)心苦敷思共約定の日又詮方無して下谷を差て行過ける跡へお夏さの供さをたる丁稚(左吉)走來り道よてお夏を見失ひ兎やせん角と十方に暮其行衛を求んとなす件くだん又て舞臺廻る下谷茅町穂積米店の場早夜に入て表を戸差女房(お崎)さきにはがれまがれ悴德太郎の介抱な一文三の行衛を心配なす折柄召使くわい忠藏(同道にて此家へ來其折に今壹人の貸方古道具屋(十兵衛)入來是も同夜の約定迄兩人是迄貸金の延引せしを怒証文面の通抵當品とうひんを持行と既に諸道具を引纏ひきまきんと仕掛け同家の差配人(薬罐の長兵衛)不取敢入來て兩人が怒を止最懃に言諭いとねん詰つり竟つひ翌日迄の日延と成長兵衛に預て兩人歸ける爰へ奥文三の母(於峯)一部始終を聞居たりて差配人よ謝たる後悴文三が數寄屋町成新常磐屋なるしんじやけ藝妓小松ようつゝを拔し内は斯成有様かくなもありさまに泪なみだる身の行末と物語を差配人は老母の心慰めて別れて我家へ立歸る(お崎)



刀耕

つ戻つせーへ主人の行衛尋ね求めん爲と言ーが其實主人へ言譯無くて此流れへ身を投ト死せん所存で有うなど釘を差れし査官が仰に今更何と言譯も無主人の行衛さへ知れ升事なら死ませぬと涙乍の物語より先主人方迄送り届けの有所を尋ねて遣んと最懇ろよ諭されて右左吉を伴ひ東仲町へと急行此折柏屋二階にて清元延壽大夫の催して新上溜璃より成東橋の方より下谷數寄屋町の藝者(小松)米屋の主人(文三)手よ手を取て此渡場に來り迭ひよ思ひ思はきて文三の既よ身代隣りに成ん所迄に立至り又小松主人新常磐屋は言よ及べず所より借財者所詮身の振方が附ね所からしと思文三郎と迭ひに茲よ身を玄づめんと長命寺の鐘よ其身の無常を觀念あし先立不孝の詫言も愚智よ鳴子の音さぬも若や退手と心を配り人通り無折を伺ひ手よ手を取て川岸に立や玄よんばかり二人影口に唱る念佛の聲と諸共汝満し角田の流れへ落込一が一息運し小松が骸骨橋の杭よ取附ホツと吐息を突鐘に身に染夜風物凄き越る

「有よもあられぬ思此身が不束成故に文三殿が小松の許へ日毎通ひて宅へは戻らず是も此身の仕様が悪敷と我身をかこつ行燈の灯も暮さ十時過我家へ歸(文三郎)何う思案の思持みて門口へ来る時惣(徳太郎)欠出て悦ぶ顔を篤見遣物思氣成有様と女房並に番頭が歸宅を悦ぶ兩人の心と逢ふ文三が様子よ如何成んと案事る折柄一度宅へ歸たる穂積文三は何を思ひけん又立出んと致す故女房惣忠藏迄不審に思ひ押止るを我へ再び小松の方へ行と言捨出行ぬ妻子は是を本意無思ひ案事煩らふ件にて此舞臺廻る本所押上村一軒家の塙此所は同夜の事にして前件にて月の輪の熊藏判人三五郎が工に依て深美の娘お夏をうそわかし東仲町の宅と僞はり此の押上村成人力車夫足長長次の宅へ挽込(熊藏)(三五郎)が取巻て恩き者になさんとするよ娘(お夏)は怕りあゝ何所成やと問たるに茲(お夏)へ十方に暮たり一が何卒我を助け玉ひ淺草の本宅へ歸一吳

と詫言すれど間入ぬ二人を(長次)は買取て左程迄に歎玉を慰者よも成難からん體に御身の内へ送り届ぬと(熊藏)等兩人よ暇を告彼(長次)がお夏を人力車よ乗引出たる其實は三五郎と言合みて淺草へ行すて何の旅にかお夏を連金になさんず惡工を哀れにも又心憂と言件にて幕二幕目隅田川道行の塙此所の前件の同夜の事よ一て雨舎に居合たる向島の若衆(丑松)に(九郎藏)ハ八百松の傘を借受此土手へ来る時吉原へ趣んと相談整ひ向越を待内渡守の船頭漕來り今柏屋へ一寸用達なし左候て後山谷塙へ戻との事にて渡守と建立行済ぬ此時東橋の方より深美的丁稚(左吉)は主人お夏の行衛知す此儘内へ歸ば主人へ云蹕無と有て娘様の行衛が知ぬと當惑して堤の内を行つ戻つて体を見咎めたる時稚丁の前の儘を物語せしに扱こそやつ兩人は娘を欺取たで有ふ然らを是より分署に於ても夫も探停の者を出し必ず遠からず捕縛よ成ん夫に汝此土手を行

心の恐敷(小松)は川中實と見て一所に死ぬも馬鹿氣ると。我名の附し蛇の目傘を印に残一死神の放れし心地ぞつとて氣の毒乍文三様冥途で暫く待てお出と落附拂ツて髪撫上不問語の身の索性よ是から暫く借金の凌ぎ又田舎の小料理屋かあいなし茶屋を拵こふと度胸を定め行掛る後立聞(月の輪熊藏)不問語を不殘聞たが能腕前的小松殿共に力を添て遣ふと詞に拘り飛退て知ぬと言ど聞入す何と詮方無り一が今此所で歸はれは我身の惡事を訴へられんと決心な一て此場を何所へ成共連立て逃て呉れんと心を定め小松が骸ハ熊藏よ任一たる思よて場行の能挨拶よ(熊藏)扱いと氣を免し共よ惡事を工つ折柄人通の有よ片脇の渡小家へ忍所へ船頭の渡守來り船を出さんともやひを解所へ土手に上りて呼掛る聲よためらへば(船木賢三郎)走來て向へ越て呉られよと頼に夜更で有事なきと夫は船賃さゑ多分よ呉れよばふ渡中と挨拶に賢三郎とほつと息直よ船へ飛乗て船頭棹差沖へ出る賢三郎と眞中與思

三幕目下谷茅町穂積米店の場一週間跡の晚主人文三一度歸宅なし直其場を小松の方へ趣くと言捨立出一其翌日新聞よ角田川三園渡船場檻橋よ小松と記たる蛇の目を残と詮方無り一が今此所で歸はれは我身の惡事を訴へられんと決心な一て此場を何所へ成共連立て逃て呉れんと心を定め小松が骸ハ熊藏よ任一たる思よて場行の能挨拶よ(熊藏)扱いと氣を免し共よ惡事を工つ折柄人通の有よ片脇の渡小家へ忍所へ船頭の渡守來り船を出さんともやひを解所へ土手に上りて呼掛る聲よためらへば(船木賢三郎)走來て向へ越て呉られよと頼に夜更で有事なきと夫は船賃さゑ多分よ呉れよばふ渡中と挨拶に賢三郎とほつと息直よ船へ飛乗て船頭棹差沖へ出る賢三郎と眞中與思

に是幸ひと内外の者に顔向の出來ぬ身に徳太郎に再び宅へは戻ぬと泪乍の暇乞に奥を出る女房の其足音に驚きて表の方へぞ出行(お崎)ハ誰やら人影に徳太郎よ問けるに今父上の來る事透一と物語れば扱い幽靈よても越一か夫共此世に御無事みてをわする事かと半真半疑聞人迷も無身の上然猶豫も成難ければ旅の用意を調ひて(忠藏)附添女房(於崎)山梨縣へ趣に老母ト里へ行件にて舞臺廻る神田川網船屋の場此日ハ主人六右衛門の亡妻が今日にて漁船の業ひを休業なし娘子兩人に精進料理の馳走をあ一四方山の咄の内死だ婆が一生涯苦勞をして死だのも元わと言ば行衛の知ぬ熊藏が身の上故と愚智ハ老の常乍其命日よ思出洞催す雨空に我身の罪の有乍亡老母の命日を忘みぬ(月の輪熊藏)ハ小遣の金よ差支無心がてらよ我家へ來於袋の命日兼實ハ金を借よ來たと咄の内に一間立出たる(穂積文三)(熊藏)思ひず顔見合不審に思ひ此間小松が心中の相人と言ひ此文三よ相違無が如何一て當家に

三幕目下谷茅町穂積米店の場一週間跡の晚主人文三一度歸宅なし直其場を小松の方へ趣くと言捨立出一其翌日新聞よ角田川三園渡船場檻橋よ小松と記たる蛇の目を残と詮方無り一が今此所で歸はれは我身の惡事を訴へられんと決心な一て此場を何所へ成共連立て逃て呉れんと心を定め小松が骸ハ熊藏よ任一たる思よて場行の能挨拶よ(熊藏)扱いと氣を免し共よ惡事を工つ折柄人通の有よ片脇の渡小家へ忍所へ船頭の渡守來り船を出さんともやひを解所へ土手に上りて呼掛けたまらへば(船木賢三郎)走來て向へ越て呉られよと頼に夜更で有事なきと夫は船賃さゑ多分よ呉れよばふ渡中と挨拶に賢三郎とほつと息直よ船へ飛乗て船頭棹差沖へ出る賢三郎と眞中與思

長居も出來ず此上ハ此内を疊々老母の里方へ引取女房かと遅れ所詮亭主文三が心中の次第が疊高く成てハ此所に崎の實家山梨縣下甲府の町の商人故右方へ一先引纏んと決定な一(忠藏)ハ誠心の產れ故徳太郎様を作ひ甲府迄御送參らせんと取戸附に掛る晚店先へ忍んで來る(角田川)、甲府の早飛脚(山蟻の義助)來り下谷茅町の穂積の主人と身を投せし文三郎折節伴(徳太郎)のみ店よ遊び居たる

居るかと委細を親父六右衛門よ問しに角田川船場よ於て藝者小松と心中されし折小松ハ其儘水死せしが文三殿は我網よ掛斗らず命を御助け申内よれ世話を致せーと物語りに(熊藏)は不思議な事と思ひし儘知らぬ顔にて居たる折甲府の早飛脚(山蟻の義助)來り下谷茅町の穂積の主人と當家よ店事を知て來り只今山梨縣立飛に脚て來り一が穂積の御内賓於崎殿が甲府の實家よ一人の老母有昨今短暮に迫り九死一生の際よ至り一度歸縣を頼度と重き枕を上られて主人かの詞に早速御迎よ參たりと下谷へ参て申せ一所早身代限の事件にて上を下へと取戻中荒増歸縣と決定せー故若文三殿御出有ば此事御傳言頗度と言共(文三)は顔を出兼六右衛門よ斗らひ呉と頼みに宜敷挨拶な一右の義助ハ歸一が(六右衛門)と文三よ向御内が身代限と成を再び御歸宅も成兼まつて於崎様御出縣と有志御内室の御里方へ御出に成て篤と相談よ及ぶが能らんと最懇ろ成扱ひに(文三)は有難泪に呉暇乞一て網船屋を出行時は

此世に居ても只小松の菩提のみ吊らわんと言精心より現
數墨染の衣を持特別る一件にて幕

四幕目甲州街道小佛崎地藏堂の場前件より下谷茅町の米店
を疊正直者の番頭(忠藏)へお崎徳太郎の介抱なし甲府へ
赴く其途中折悪敷夜に掛此小佛崎を掛し所月に有共葉越
にして小關さ山路を主從三人漸々にたゞり来て峠の地藏
堂に憩ひ烟草杯附て一息突内忠義成(忠藏)は邊に人無山
道故於崎の袖を押へ宛此山中へ連出たと實ハ穗積の御主
人方へ奉公仕を致せし時より於崎を深く思ひ初しが主有者
故手出しも成す本意無事と憂年月思ひを掛け此程も文
三様の數寄屋町の小松にうつゝを抜せ一上心中迄する人
でな一夫又引替於崎様可愛相と恩程一層此身又經慈が
彌増思ひよ思つた此道中何卒日比の思ひを晴させて言事
利て貢ひ度若又夫が叶わすを可愛さ余ツて價さが百倍此
山中で強陰一た上此谷川へ投込を犬の餌食り魚に喰れ無
衡極まる事成が悴を可愛思ふなら今此所でうんと見て此

二親が無事で有べ猶の事一先彼地へ趣むかんと是よて
甲作宿有所迄悴徳太郎を脊負送り行件にて幕

五幕目東海道大磯驛入口三五郎住居の場前幕より本所押上
人人力車にて内へ送り届けると見て道より余所へそぞ狼轡
を以て此所迄連來一源美の娘(お夏)を此家より伏置彌々小
田原驛成相摸屋與吉貸座舗へ百圓金を借住込事に決定
遜んとするお夏を無理に小田原へ連行娼妓に成ん惡工と
に同木求むる(月の輪熊藏)神田川網船屋六右衛門方より居
る角田川に於て小松の惡事を見出一其夜旅行と志す折
小松を失ひ取附蔓の無り一故金錢無六右衛門方へ行たる
所へ大磯より於夏身の上小田原へ資込との郵便より取あへ
ず馬車にて此所へ來り(三五郎)と打合せの上兩人小田原
へ趣事に極りしを(於夏)へ聞扱ひ彌々とわかしよ達志
と悔めど今更詮方無くさめると泣居たるをとぞ一つなだ
めつ兩人にて小田原驛へ逃て行此件みて舞臺廻る

同小田原驛貸座舗相摸屋の場二階裏座舗に三日程居續を

忠藏より抱れて寐るとの引させぬ板縫(於崎)に今更逃
る道無と追つする此内よ(忠藏)といら立て是は最一

鶴道(石和の甲作)と見る者此所に通り掛り如斯有様み己
惡者女子を心助けて遣んと飛び入忠藏をさゝゑる所へ前
件にて甲府より飛脚成と於崎の迎ひに下谷へ行一山蠟義
助ひ豫て忠藏より同腹中成是も惡徒の一人みて是へ加わり
居たり志を(甲作)へ己等遂そふかと有合木の枝追取て打

て掛るを兩人と受つ押名つ操作しがやゝ有て甲作が腕の
力より危ふく成跡ぢさりする其内に後の崖へ眞逆様も幾丈
と無落でんげる(甲作)こ諸打詠め我が此谷へ投込だと言
説で無けれど答目を受る筈も無只人を助る爲さゝゑた時
に惡徒等が我手に茲へ落さるは思へ不便あ事成と言を
(於崎)へ悴と共に此後れ答有ふ共我等も其時証人にて御
身の難義に成様な決して事へ致すまト御安堵有と云ける
を(甲作)亥をより行先い何成やと問たるに甲府に居る

せし客は相方於千代速是れば角田川の後熊藏を道にて藤
たる藝妓小松みて自ら小田原にて於千代と藝名爲娼妓と
成しと此居續客買詰にして遊び居たる折源美の娘を判人
(三五郎)親元分(月の輪熊藏)同道みて當家へ住込の掛合
よ來斗らず娼妓(於千代)と顔見合せ互に憐りな一たるが
(熊藏)へ能も先比我を偽り行衛を隠して居たる成と案内
も無右掲詰の客の座舗へ來於千代の身の上を談訴し惡口
を言し上手切の金の無心を爲を居合一たる客扱ひて五十
圓の手切金を出一熊藏を歸す此跡より互に身の上附しを
なすと此居續客と云ひ三園渡船場にて夜目に若やと思ひ
一小松が亭主船木賢三郎みて其後所よりを惡事を勧らき此
小田原より先へ行兼相摸屋にて斗らず女房於千代に出逢昔
語をなし兎に角今の熊藏より五十圓と言金圓を渡せしは殘
念成と云(賢三郎)打消今審此小田原を逐天せん心組故
熊藏の戻りを酒匂川迄て行切殺して金の元へ取戻すが
我當所を立退上り於千代も身の上最危ふし此身も跡より

来るへ一と(賢三郎)へ身支度なし落行先の甲州路篠子峠

の安泊からくり屋迄来る可と送ひよしめし合したる時も

八時の九時近く酒匂を差て出て行是にて舞臺廻る

同酒匂川松原の堺雨催ひの眞の闇水嵐増る水勢よ落来る

音のすさまじく最物凄き有様(熊藏)へ三五郎と思ふ

成實入の能さよ悦び勇々歸来る跡を呼來る賢三郎に何心

無立止り呼戻したる用事を聞ひ金の聊厭わねむお千代の

身の上二つに之此身の事を其方か必ず告訴あすと見て態

を此賢三郎に渡して呉と以ての外成詞に驚き抑て汝を強

盜ならんと手取になさんと組附を(賢三郎)へ懷ろ短剣

を取出し一太刀熊藏に切附る(三五郎)は惄り無雲を震

と逃散たり熊藏は血に成たる疵にも屈せず負すをとらず

戰ひしが體の勞れ此所の痛に竟よ五体も叶すして其儘川

原へ死したりける(賢三郎)之邊を伺ひ熊藏が死骸の懷中

ふ以前渡せし五十圓を取出し懷中爲て立出る折柄(於夏)

此所へ逃來り賢三郎又助けを乞名前を聞其昔大恩請し者

の娘も一先同道あせし上御實家へ送らんと言件よて幕

六幕目甲州篠子安泊の場此所は合の驛故諸商人物賀ひ千

ヶ寺參り旅役者杯各自身よ焚出して泊をなす此家の主人

の罷の七兵衛と言て若き時も善惡共種々苦勞せし人物

て毎夜の泊りよ諸國の疇さも能あれ先頃も當宿に一間を

借身を隠して居たる酒匂川にて月の輪熊藏を切害した

る賢三郎此身一人殺一の有身の上に言ひ日影の賢三郎表

向他出も成ねむ夏を東京へ送つて行兼余義無同道にて

此篠子下へ一間を借受居たる跡を小田原を欠落なし(於

千代)は豫て申合せ此安泊へ泊り居て茲に一事件生ト

が無事よ東京へ送らせるよも然るべき人無して日毎心を

たる賢三郎が其昔大恩受し渥美の娘御一先茲へ連來し

が無事よ東京へ送らせるよも然るべき人無して日毎心を

煩ふを知(於千代)女の格氣小田原の相模屋へ奉公住

をした時にあの於夏を見初めて自此篠子遠遠て來り私が

居ぬ其時も樂む心で有ふがと朝な夕なよ於夏を捕へ賣

りて一切無只賢三郎が慰み者よ此篠子へ連來り一との

思詰其恨晴すして翌日を送も不便なれ同ト思の親子連

(甲作)に道みて暇を告便りさて此所へ來り早駆中の旅店

へも泊事叶ひずして此安泊の行燈を幸ひ成と門に音信一

夜の舍りを願しに此家の亭主(鷹の七兵衛)早六十路余よ

ゆりたる腰も漸々送る日の貢敷暮一の安泊り門の二人を

打見遣を身形變形へやつれて居れど連し子供の様と云賤

の街道よとつ追つするれ内の門如何成方々知らね共譬旅

ふが夫文三が心中と事極りてお見世を鑑親子散らむら、
公人に既の事手込にあらんと致せー所通掛りの人々救ひ
よ私ハ甲府成家質へ戻る其道みて供に連たる忠藏と言奉
れ危ふき場所を助かりま一たが今日斗らすも時へ掛け早
夜又入て行先の歩行も成兼此を内へ一夜の泊りを願ひま
しるが何卒此轍御承知有て御聞濟下さり升様御願ひ申上
升と哀れもよふす長物語より胸に差釘の(於千代)ハ有
も非れぬ思いつそ其心中せし小松と明して仕舞ふかと
口迄出しが又押鎮め是は此場で明んさる影身乍詫をなし
懇ろにしてやる方かいつかと報ひ来るべしと催す泪呑込
て夫は無か一御難義成ん増て子供を連し旅館御船は無共
此方を御世話せんが折悪敷今晚ハ日中約束せし千ヶ寺參
と旅商人の泊有尤是成旅宿ハ駒に有立派な内と違ひ合の
隣の安泊夜るの者迄間み合兼所詮お留中兼れを夫を必ず
惡鋪思ひ玉ふなあれ共斯言此身近元ハ東京下谷邊に住居
せし事も有ば御身の不仕合せを御聞中と誠よ御氣の毒に

思ふ故今泊りを御断り申共央一て御身の御難義に成様な
事へ致さず是より宿有所迄備成人を附送らせ申參らす可
頃此お内義の夫成文三殿にハ一方成す恩み成たる其揚句
と深切面よ顯われて介抱なすも其實ハ以前我小松と言し
此身の爲に隅田川みて一人心中迄をさせ道成ぬ事をせ
悪の報ひの方部が一善よ歸さん思にて心の内に説言なし
駕有所迄此家の主人(鶴の七兵衛)と言附て送心の内と外
泣自も明ぬ臘夜に案内されて出て行文三女房悴の(徳太)
禮の詞よ盡し宛行過る跡打詠め道成事をして今日影の身
と成しも是も因果の巡り來て今宵現在文三殿の妻子が爰
へ來るのは面目も無事成と後悔先み立切し障子の内より
賢三郎(於夏)と伴ひ立出て於千代が格氣嫉妬よて此於夏
を賢三郎が恩者とせし杯と今之今迄疑たるが實ハ酒匂川
の川原みて我よ刃向ふ山せげん化地藏と仇名する三五郎
を切害無又其折組一たる人力車勘次迄惡ひ奴とは言乍切
捨たる其所へ於夏が欠落致して此所にて出くわ一其身の

の間に臥んとして居たる折泊りに附たハ其以前向島で一
人心中させし穂積文三殿若もあひ家で出逢つたなら必ず
恨みを返さふと刃物ざんまい位いは致さんとぞつとこわ
氣が立た故裏からそつと抜出して此時迄來る途中俄々降
出ひす此大雪亦冬の口とぞ言ど不思議な事と思ひ宛身を
隠さんと志たる折積る木影の白雪ある休兼たる胸こがす
心の恨み消兼て前後に心置道みて(於千代)と出達し穂積
(文三)思はず二人顔見合初は於千代で有たりと言も遅一
と醫惱と腕も折よと續打まアを待てと言聲も利ぬ(文三)
ハ用意や玄けん隠し持たる短刀取出一太刀切て掛る所
を(於千代)ハ苦痛堪兼何卒も助け下されと右と左へ逃廻
るを何で己を逐そよと血み染りたる髮の毛根も恨みの刃
通れよと止めの刀諸共にわつと斗に息絶一と思の外に一
睡の夢へ破れて跡も無矣ハ筆子の地蔵堂夕邊内みて勝負
事せし其勞をみて斗すもうとく志たる其處に文三殿よ
出逢一事も恨みの飴よ切られしとい身の毛もまだつ今見



たる夢へうつゝか有々と未だに目先に残りしと一人言なる其内に遙向よの山間よこたまに響く狼の聲（於千代）ハ驚ひてそんなら策を瞬み聞し根子崎の狼成やとどつ追つする其内又こなたの大樹の根方一疋二疋三疋と出（於千代）ハ拘り無是能汝今夜此身を助け與なば後日食物持參無必らず命を取まいぞよ云聞されど恐しき畜生づれみて匂ひをかぎ遠吠なす内又二疋三疋と寄來に是へ最（於千代）が拘り無是能汝今夜此身を助け與なば後日食物持參無必らず命を取まいぞよ云聞されど恐しき畜生づれみて匂ひをかぎ遠吠なす内又二疋三疋と寄來に是へ最も當らぬ斗りにて互へ無息の絶よける於千代が死敵を出さんとする所へ狼一疋飛掛り（於千代）が足へ喰附を何かわ以て堪るべきだち々とする所を又一疋の狼が肩先目掛又掛るあれ苦しや助けてくれとけつまろびつ逃廻る段々友を呼犬の數も重成身の罪よ此世から成畜生消目狼ハ數多取巻爰かしこ喰取をなせし上於千代が首級喰切同甲痴駒飼山捕物の堺甲府の獵師（根子の木）

太八）鉄砲かつぎ山獵の出掛とて二人夜山の得物をせんとあなたの谷へ下て行道巾狭日影成（船木賢三郎）ハ安泊の主人が其筋へ訴へに露現の小口と心を附此所迄逃出せしが折柄片名の岩山より首級をくわぬし狼かのそく出るを急度目を附見れば女郎故にふと目を附る（賢三郎）能々見れた小松が首級能似た事も物と又も能々改むれば體に女房小松の首いか成事と仰天無一刀抜て打て掛けを立たぬの犬ハ怒りの顔色一疋飛に掛らんと賢三郎に立向へを能見バ體に於千代が首級成に如何して此姿とわつと斗りに催したる折柄こなた一疋影も兼て伺ひたる手先大勢出来御用々の聲諸共（賢三郎）へ組附を抜つくべりつ手練の早業數刻よ渡つて居たりしが山の根の谷間より立かけろふの其中へ敵か味方か譯り兼もたれつもれつなす内に狼る取扱たる於千代が首級取上たるを誤つて放したるとづみ

みああたの谷間へ首級落て行衛玄れず（賢三郎）ハ取返さんと思へど數丈の谷底に何と詮方無所へ又もや掛る手先の聲是と退れて走り行件みて幕

同引返し甲痴石和川飼遣ひの場此場やはり前件根子の廻たる同國駒飼山下流の件砂利の淺瀬の急流を飼遣ひ石和の（甲作）同憚（乙松）今宵ハ雨氣よ仲間の者が一人も仕事に出ぬが早く一仕事したら上て宅へ歸らふと綱さばきして演する尾上菊五郎の當狂言稽古に取掛る前々日武痴玉川四谷村飼遣尾之右衛門方で便り行飼繩を扱ひ篝火の持方飼籠と飼を出す件教授を頼み委鋪調べ演する故眞の飼遣ひが飼と遣う様を見る如く成）憚乙松の松明持も流れへ立込漁に余念も無りしが程有て上流より女の首級流れ来るに未若年の乙松故氣味悪々突進を幾度突ても又元へ流れ來つて甲作が片足の許に寄添へ流れの摸様か知らぬ其又爰へ寄來るこ不思議な事と件の首取上て篤見をば甲作が

實の妹久鋪助より別れたる其後の江戸に行ひと聞しが性來身持籠らぬ奴若や此近邊にて賊にでも出逢て一命捨一物と見得るが今更悔んで詮無事だが不便な事を致したと尋も忘める雨催哀れよ時を寫し行水音高き石和川乙松諸共其晩の漁る業を早く切上涙乍に妹が首級鵜籠と共に鮎籠へ入月さへも無闇よ聞き心の兄弟が流れを上り陸に出便山道踏分で我家へこそ立歸る其道々も引立ぬ心の胸みとつ追つ如何して此首級を母に見せんと苦勞する子の孝心の兩人の世間の人への教へ成件よて幕

八幕目甲荔石和村鵜飼甲作住家の場此石和村者街道方遙在方にて人家も稀成川添に最淋敷片田舎片手業成百姓士鵜飼早瀬村の岩五郎が女房(かわい)早川村の鵜飼小川を渡世を兼し鵜飼等の月の夜道の鮎取の業ひの無仲間同の團子が好故福分爲と取出すそげしのしろの重團に古き一布の風呂敷ハ中何共白團子於袋ふ内ケ音信しと言聲

口しに言ね共惡ひ事も度々有由夫を憚が二入て機嫌を取て與るのがいかにも氣の毒千万故いつそ是なら死たいと愚智が先立老が癖聞女房達も力を添又能春も有ふから必ずくよ々思わず骸を丈夫持が能と最懇に介抱な一別れて我家へ歸りける同ト思ひに(甲作)が兄弟思ふ眞實の心に同ト(乙松)も共に連立歸り来て首級を入れ鮎籠はかた名の藝家へ隠し置内の様子と伺ふ折其日此家へ尋ね來る之筆子瞬で甲作又助けられたる穂積の女房(於崎)の憚心(徳太)の手を引連し其跡を番頭(忠藏)包を背負ひ此甲作の内より有し時の物語を種々の難義を致せし折玉川在へ御出掛此家の主人甲作殿の仰ゆゑ別て御禮より出ましてみると述けれど老母の色々介抱無何の無共茶を煮れを一間の顔にて内より心得ぬはあの客人現在家來の身分として御出有まほーと案内して通ける跡(甲作)(乙松)の何知

如何した譯と不審立所へ老母立出て委細を聞バ筆子にて一旦主人より當る御方を手込みせんとして甲作殿が止たので其場を退れて仕舞たが段々思ひ直して見と主人へ手を出すと言は言語も絶たる事成と我と我身も悔悟無同時の安泊の鬚の七兵衛と言人に頼み泊りに來られし其時も詫を濟せし上恩返しよ甲府成御實家迄送らんと供して來たる其道より少しの廻りよ此村へ立寄らせ玉ひて甲作に逢事成夫又附ても世の中は先安心と言事の無物成先年内を出た切にて未だ妹か千代事何國に居るう知らぬ共行衛ハ面會なさんと來られしと委細を聞て(甲作)の夫の誠に能知ぬ身の行末惡敷事を言にと有ねど若妹於千代變でも有たら定めし老母の歎かれ様と胸に一物(甲作)が間に老母の何のくくな能二人の憚が内に居世話して與るもの翌が日於千代より變有共決して歎こ致されと男増りの母親主婦(あね)お嫁(お嫁)を口説既に手込み成んとせー所へおれが立派な詞(甲作)のホット一息空間も無然ぞ御目よ掛け立派な詞(甲作)のホット一息空間も無然ぞ御目よ掛け品有篤見玉へと鮎籠を取出す首を母の前夜目よりわくね

老眼に行燈の燈心から立乍目鏡を掛て能見れを紛ぶ方無
娘の首級扱へ何頃ク賊にでも殺されし事成と泪押へて泣
度を内々呑込せつなさを二人ハ傍で推量無實ひ泪も眞身
の兄弟心の内を哀れ成始終を立闘表の方案内乞て入來る
は駒飼山又て手先に達既に捕縛されんとして其場を退れ
山道連ひ夜中へ掛て逃來る(船木賢三郎)又て委細の表で
聞たるが其於千代と申ハ先頃迄東京まで小松と言一藝妓
成が同所の茅町に穂積文三と言者と二世の約束致せし上
隅田川まで心中無己の一人命助かり世間の者より死だと
見せ夫君所々を歩行た上我と夫婦の約束せし故二人姫子
の麓よて身を隠たる其内に(於千代)ハ表の地蔵堂よて狼
又出逢ひ章よ其身を果して仕舞我ハ手先の中を退山中に
趣さしが生首くわゑー狼に出逢直一刀よ切て捨首級を見
そば於千代が首如何致せ一事成かと思所へ又候や手先の
来るに退れんと混雜なす其内に右の首級ハ谷間へ落した
るのが此首級と一部始終の物語りを奥に闇居る文三夫婦

(忠藏)伴ひ立出でそんなら我が身を果せし小松ハ姫子時
にて狼の爲より身を果せしかと云(船木)の顔打見やり驚
ひたるは文三事の義理有人の性みて夫に我女房の於千代
が小松と變名無一人心中させたのも是も濟ざる事成と身
の云蹕と二みハ所詮所刑に成事ハ酒匂川の人殺有退れぬ
多之助が見事の死を心致けり是にて小松賢三郎の身を果
せしも是惡因惡果の人の教是を第一番目の結局となす幕
(大切)所作事舞臺一面の五月幟の幕を引頭取淨るりの口
上ふれ有て此幕落と高砂の肘と姥五月幟面の所作の振
事に成是と(清元連中)にて相勤後に此兩人引抜よて鎧持
の奴に成是と(長唄連中)にて足拍子の振事有て下手追入
跡やはり荷面の鐘馗の形出て來り眼やか成振事有て是
へ赤鬼青鬼大勢出て立廻りに成是と(長唄四子連中)にて
振事有て目出度打出し

明治十九年四月廿四日御届
同 年五月廿五日出版 (定價八錢)

編輯兼版出人

齋

藤 長

八

振事有て目出度打出し